

体験版

寝取り寝取られ振り振られ

—— 心美とお兄ちゃんのとんでもない一日 ——

① 悪戯の代償

なつめ なつめ

夏目 棗

□□登場人物□□

● 心美（ここみ） || 身長… 149cm、体重… 42kg、スリーサイズ… 87（Cカット）・58・82。長い髪をサイドテールに、右側頭部のミニお下げがチャームポイント。椎葉学園（しいばがくえん）二回生。かなりブラコン。彼氏あり（兄の親友）。えっち経験回数二回（勿論二回とも相手は彼氏）。



● お兄ちゃん || 背は高く筋肉質。それ以外にこれといった取り柄なし（↑あくまで心美視点）。椎葉学園三回生。帰宅部。『ど』のつくシスコン。彼女居ない歴を生まれて此の方更新中、勿論童貞。

● 神部雅樹（かんべまさき） || 椎葉学園三回生。サッカー部（最後の夏にインハイ出場を目差して奮闘中）。お兄ちゃん曰く小学校以来の“マブだち”。心美の彼氏。

● 香坂千歳（こうさかちとせ） || 身長・154 cm、体重・49 kg、スリーサイズ・92 (Dカップ)・59・88。椎葉学園二回生。学園入学以来の心美の親友。あまり大きくはないがITベンチャー企業の社長令嬢。えっち経験はそれなりに豊富だが何故か特定の彼氏は作らない。

——とん……とん……

「お兄ちゃん？ ……心美（ここみ）だよ？」

兄の部屋の扉を控えめにノックして心美が声を掛けたのは、夏休みも残り一週間あまりというある昼下がりであった。

母親から兄の見張り（夏休みの課題を終わらせる）を言い遣った優等生の心美は、当然自分の課題は疾（と）うの昔に終わらせていた。

「お兄ちゃん？」

もう一度、少し声を高めて呼び掛ける。

しかし、部屋の中から返事はなかった。

——とん、とん、とんっ！

少し忙（せわ）しないノックの音を響かせて心美が更に声をあげた。

「もおう、入るよっ？」

乱暴に扉を開いて一步部屋に入ると、昼だというのにカーテンを閉め切った薄暗い部屋に微かにクーラーの音がしていた。

しかし、勉強机に兄の姿はなく、ノックの音に返事がなかった時点で心美が予想した通りの場所にその姿はあった。タオルケットを身体に巻いて向こうを向いて爆睡中の兄に、やれ、やれ、と心美が首を振る。

「……………やっぱり、寝てるしい！……………つて、なに？……………この変な匂い……………」
部屋の扉を閉めてから、心美は鼻を歪めて顔を顰（しか）めた。

「…お兄ちゃんを受験生なんだから、もう少し自覚を…ったあ！」

兄を叩き起こそうと歩み寄った心美が、言葉の途中で声を詰まらせた。

何かに蹴躓（けつまず）いて見降ろせば分厚いまんが本のようなだった。

「もおう、こんな処に放りだしたままで……………いつつも、だらしないんだから……………」

拾いあげて本棚に片づけようとタイトルを見れば『妹の縦スジ』とある。

何とも直球なタイトルであった。勿論、表紙絵も、エッチだった。

恐る恐るページを繰ると、微妙に開き癖のついたページがあった。多分、**使用頻度の高いページ**（笑）であろうが、そんな事が優等生の心美に判る筈もなかった。いや、それ以前に、そのページに描かれた卑猥な絵と吹きだしの台詞に眼を奪われていた。

ブレザーを着た可愛い系の美少女の口に巨大なペニスを突っ込んで高校生っぽい男

子が声を上擦らせて叫んでいた。

『ことみーっ……ことみの口に……だ、だしていいか？』

美少女も目尻に涙など浮かべながらも健気に答えている。

『いいよ♪……らして、らひてーっ！……お兄ちゃんの、えっちなザーメン……ことみのお口に、いっばい、らしてーっ♪』

『ことみ』という文字が『ことみ』に見えて、心美の心臓が、どくん、と鳴った。

(お、おとお、お兄ちゃんっ！)

勿論、もう一度確かめるように見てみれば『ことみ』という名前である。

(でも、まさか……お兄ちゃん……)

心美の学園（勿論兄も一緒だが）の女子の制服はブレザータイプである。もう一度、ちらっ、と見遣ればその美少女の顔や長い髪をサイドテールにした髪型は心美に似ているような気も……しないでもなかった。

しかし、ふるふるっ、と可変（おか）しな想像を頭から追い遣って本を閉じた、その時――。

「う、うーん……」

何やら小さく呻いて寝返りを打った兄が仰向けになって、しかも、暑いのかタオルケットを蹴飛ばしたのだった。

「◆%#◇●◁つっ!?!」

咄嗟に両掌で口を押さえて心美が悲鳴を飲み込んだ。

「——な、ななな、なんで素っ裸で、寝てるのよーっ!……お、おち、おち、おち……んちん……ま、丸だし……でえ……っ!」

心美には彼氏がいる。兄の友人（お兄ちゃん曰く小学校以来の「マブだち」だそうな）の神部雅樹（かんべまさき）である。あまり家へ来て遊ぶ事はなかった彼が、心美が中学にあがった頃から頻繁にやってくるようになった。「お兄ちゃん子」だった心美は彼にはあまり興味を持たなかったのだが、兄がちとも相手をしてくれない対戦型落ち物パズルゲームにも厭な顔ひとつしないで熱心に付き合ってくれたりする内に、次第に好感を覚えていったのだった。しかし、心美が兄と同じ学園（彼も同じだった）に入学して間もない頃、彼から告白される。吃驚（びっくり）して兄に相談すると、一言『だめだっ!』で敢えなく彼の思いは潰えてしまった。（まあ、心美もそれ程乗り気ではなかったのもあるのだが……）

それでも、以来一年、兄を説得し続けた彼の熱意に渋々OKをだしたのが今年の春であった。それには、毎日のように学園のシューズロッカーに入れられた数多の男子からの手紙を『これ、どうしよう…どうしたらいい？』と兄に見せに来る心美の、学園での**人気度**に閉口したという事情も大きな助けとなったのだった。何処の馬の骨とも知れぬ野郎に搔っ攫(さら)われるよりは…と兄が思ったのかどうか、真意は定かではなかったが、こうして二人は付き合い始めたのだった。

実は、初体験もふた月程前に済ませてしまった。勿論、兄には内緒である。しかし、ただただ痛かった記憶しか残らなかった心美は、二回目を求める彼氏の要求を必死に言い訳を作っては回避し続けていた。

「——って……やだ、やだあ……こ、心美ったら……お、おお、お兄ちゃんの……お、おち、おち、おち……んちん……握っちやてるよう！」

気がつけばいつの間にか心美はベッドサイドに跪き、兄の剥きだしの《逸物》を握り締めていた。しかも、心美の手指が、ゆっくり、と上下に動いていてではないか。しかし、心美の為に断言しておくが、心美が《ペニス》を扱い慣れていたからでは決して無い。そうではなくて、幼少時に一緒に風呂に入っていたも兄の《おちんちん》

を洗ってあげていた記憶が、至極自然に《それ》を握らせ、扱かせていたのだ……と、思う。勿論、陰毛がこんなな、びっしり、と生え揃う以前の、遙か昔の話だったのだが……。

そして、兄の《逸物》が心美の手指の中で硬度を増していった。

(こ、これって……か、硬くなってる？……ね、眠ってるのに……ぼ、ぼぼぼ、勃
起っっ！)

勿論、この年代の正常な男子の下半身に当人の意識など無関係な事を、経験の浅い優等生の心美が知ろう筈もない。

心美の脳裏に彼との『二回目』の場面が、まざまざ、と思い起こされた。

デートのたびに身体を求める彼氏に断る理由も底を衝いた心美が、一学期の終業式の日、学園入学以来の親友の香坂千歳(こうさかちとせ)から言われた一言で、漸く決断を下したのだった。

「あなた、あんまり拒んでばかりいると他の女子に乗り換えられるわよ？……心美のお兄さん程じゃないけど、神部先輩だって結構ランク高いんだからね？」

「え？……お兄ちゃん程じゃないって……お兄ちゃんなんてランク外でしょ？」

「彼氏のランク」に就いてより「お兄ちゃんのランク」を気に留める心美に、親友は、げんなり、として答えた。

「あんた、ばか？ ……あんたのお兄さんって学園全体のランクでもトップ一〇に入ってるしい…一年の女子ランクだと一、二を争ってるのよっ！ ……知らなかったの？」

「う、うそっ！」

「嘘なもんかねっ！」

「だ、だって、あの お兄ちゃんだよ？ ……有り得ない！」

自宅でのだらしない姿しか知らない心美が口をへの字に曲げて言い募る。

「…そ、それにさ…彼女なんて居ないっていうかあ、家に女の子連れて来たコトもないしい…で、デートだって心美以外としたコトなんか…たぶん、無いんじゃないかなーっ？」

「あんたねえ、妹と遊びに行くの、デートとは呼ばないわよっ！」

呆れ顔の千歳に不満、たらたら、の心美だった。

「そうかなあ？ ……お兄ちゃんに『これからデートしない？』って訊くといつも嬉しそうにオーケーするよ？」

「だ、か、らっ！……それが問題なお！」

「何が？」

「あんたのブラコンと、お兄さんのシスコン……よっ！」

「わ、わわ、わたしは……お兄ちゃんのコト……す、好きだけどう……お、お兄ちゃんはシスコンかなあ？」

何気に「お兄ちゃんラブ」を告白している心美に、些か冷ややかな視線を投げて千歳が断言した。

「シスコンですっ！……そりやあもう、『ど』のつくシスコンですうっ！」

「そうかなあ……？」

「だ・か・らあ、あんたが神部先輩と付き合う事になって、そりやもう驚天動地だったわよーっ！」

「……うーん……」

「おまけに、えっちまでしちやって、お兄さんが良く黙ってるなって……」

千歳の言葉が終わらぬ内に被せるように心美が叫んでいた。

「な、ななな、内緒だモン……お兄ちゃんにはっ！」

「でしょうねえ……バレたら、神部先輩、お兄さんに半殺しだわっ！」

やれやれ、という顔で千歳が結論づけた。

「いい？……心美のお兄さんが『ど』のつくシスコンだから、みんなアタックないだけなのっ！……それさえなけりゃ、あたしだって……」

「え？」

「な、何でもないっ！……それより、お兄さんの話じゃないのっ！神部先輩の話でしょ？」

「……う、うん……」

「夏休みに入ったら直ぐに合宿なんでしょ？」

「うん、長期合宿で、地区予選があつて、勝ち進むとインターハイがあつて……それで夏休みは終わりだつて、言つてた……」

「神部先輩のサッカー部なら間違いないインハイ出場よっ！……だから、今日しかないでしょ？」

「何が？」

「あ、あんたはーっ！……こんな時こそ『合宿 頑張ってくださいっ、カッコ、ハート、カッコ閉じ』つて言つて身体で激励するのよっ！……決まつてるでしょ？」

「か、かかか、からだだつて……え、ええ、えっち……するの？」

「——ったりまえだっつーのっ！……デートのたびに求められて どうしようって話でしょ？」

「……そ、そうだけど……」

俯いて曖昧な返事を返す心美に千歳が朗らかに言い放った。

「おフェラに、パイ擦りにい、挿入はバックからがベターねっ♪」

「おふえ、ふえふえ、おふえら……ぱ、ぱぱぱ、ぱい……にい……」

「ちよっと、ハードルが高過ぎたかしら？」

椰揄(からか)うように笑う千歳に、くび、くび、と頷いて心美は言ったのだった。

「だ、だつて……ま、まだ……に、二回目……だよう……」

——そんな訳で、夏休みに入ると直ぐに部活の長期合宿が待っている神部先輩に、終業式の日に激励も込めて『二回目』をOKした心美だったのだが……。

しきりにフェラチオを求められて『今日はまだ許して』と逃げ腰の心美に、先輩が些か切れ掛けた挙句のベッドインだった。気持ちの擦れ違うままに身体を重ねては盛りあがり欠けたのも致し方なかった。それにも増してまだ二回目のエッチの心美と先輩である。

挙句、自分の快感だけで腰を振って先輩は、啜えてくれなかった腹いせだったのか

心美の口元にフィニッシュしてしまったのだった。

大泣きに泣いて絶交を宣言して先輩の家から逃げ帰ってから早ひと月あまり。携帯にでようとしないう心美にメールで謝り続ける先輩に、許すきっかけを見つけれないまま日は過ぎてしまった。そして、合宿に続いて地区予選を勝ち進んでインターハイ出場が決まった先輩とは、あれ以来、会えず終いであった。

(やっぱり男の子ってお口でして欲しいのかな……)

先輩のせつなそうな顔を思い出しながらそんな事を呟いて、心美は扱っていた兄の《逸物》に唇を近づけていった。

——れろっ、えろ……ちる、れる……

(ちよっと、しよっぱい……)

汗だろうか、それともおしっこかも……という考えが脳裏を過(よ)ぎったが、不思議と兄のモノなら平気な気がした。あんなに大泣きした先輩との『二回目』を思い出して微かに苦笑を洩らす。

(そうだわ、お兄ちゃんの《コレ》で練習すればいいんだ♪)

ふと、思いついた考えに、俄然ヤル気が増した。

——れろんっ、ちろ、るろっ……ちゆる、れる、えろっ……

《逸物》の根元を握り直して《幹》に舌を這わせていた心美が、ふと、先端の割れ目に何やら白くこびりついているモノがあるのに気がついた。

「……ん？……（れろっ、ちゆるっ）……へ、変なあじい……にがいしい……」
舌先で舐め取って味わってから、ひと月前のあの悪夢が再び甦った。

（一）、（二）、これって……せ、精液ーっ!?!）

その時、未だ片手に持っていた兄のまんが本が床に落ちた。

（も、も、もしかして……お兄ちゃんったら……こ、この「ご本」を見ながら……
あ、ああ、アレ……して……そ、そのまま眠っちゃったのう？）

勿論、心美とて《ひとりエッチ》くらいする。

いや、それ処か、その行為中のある出来事がトラウマとなって、彼氏とのエッチが上手くいかなかった節さえあったのだ。

処女の頃の心美の《ひとりエッチ》はクリトリス派であった（いや、二回経験した後でもクリトリス派であるはあるのだが……）。そんなある日、**具合が非常に良かった**心美は微かに潮を吹いてしまったのだ。それを失禁だと勘違いした心美はそれ以来

暫（しばらく）の間悩み続け、《ひとりエッチ》も怖くてできなくなってしまっていたのだった。勿論、両親や兄に訊ける話題ではない。迷いに迷った挙句、親友の千歳に相談して、それが《おしっこ》ではなく《潮吹き》という愛液に似た成分である事を教えられ漸く安心したのだった。

そんな訳で、心美は先輩とのエッチの場面で必要以上に快感に身を委ねられなかったのだ。勿論、痛いだけだった初体験では無理にしても、ひと月経って破瓜の裂傷も癒えた二回目なら、もっと積極的に心を委ねたら、絶頂とまでいかなかったも豊かに実りあるエッチができた筈なのだ。しかし、《潮吹き》をしてしまったら《お漏らし》したと思われまいだろうか？ 経験豊富な千歳と違い先輩も心美が初体験だと告白されていた心美には、そんな風に勘違いされる事が怖かったのだった。

「よし、決めたっ！ ……お兄ちゃんのおちんちんで練習しようっ♪」
決断するように声にだして、心美は兄の《逸物》を頼張ったのだった。

——あむっ、じゅるる、ちゅぷっ……んふっ、ずじゅ……じゅる、ちゅぽっ……はぶ……う……ちゅぶっ、ちゅぽっ……くちゅっ、ちゅぷっ、くぶっ……ちゅぶっ、ぢゅる、ちゅぽっ……ん、ん……ぢゅる、くりゅ、ちゅろっ……

——はむっ、ちゅぼっ、くぶっ……るろっ、えろっ……ぢゅぢゅ、じゅぶっ、じゅぶう……ちゅぶっ、じゅるっ……ん、んぐっ……んぶ、ちゅぼ、ちゅぶっ……ちゅろ、れろ、るろっ……ん、あふっ……は……あ……はふう……

練習だった筈の初フェラチオに夢中になっている心美を、いつの間に眼を覚ましたのか薄目を開けた兄が、こっそり、観察していた。しかし、うっとり、と両目を瞑って口唇愛撫(れんしゅう)に熱中している心美が気づく様子はなかった。それ処か、心美の右手は短いスカートの中に潜り込み、ショーツの股間を(まさに『妹の縦スジ』を)弄り始めていたのだった。

「おにいひちゃんの……(はふ、ちろっ)……おちんちん……(れる、えろっ)……おっひすぎるよう……(ぺちゅ、ちゅびっ、ちろう)……へんばいのよりい、おっひい……(ちゅぼんっ!)」

一旦、口腔から吐き戻した《逸物》に、すり、すり、と愛おしそうに頬擦りしながら心美が訴える。

「心美、顎が疲れちゃったよう……それも、お兄ちゃんのおちんちんがおつきいから、だよう? ……でも……先輩にお口でしてって言われた時はあーんなに厭だったのに……お兄ちゃんのなら平気って、なんでだろ?」

もう一度、確認するように兄の《逸物》を見遣って心美が笑みを洩らす。幼少時に一緒に風呂呂に入った時はよく悪戯して兄を困らせたり、逆に心美の両手で洗ってあげたりしたものだ。勿論、その頃の兄の《おちんちん》はこれ程遅しくはなかったし、陰毛も生い茂ってはいなかったのだが。

「んふっ♪……先輩のはグロイって思っちゃったけど、お兄ちゃんのは先輩のよりおっきいのに、可愛い♡」

そしてまた、れろん、れろう、と舐めあげる。

「あっ♪……いま、ぴくん、ぴくんっ……てしたあっ♪……ここが、気持ちいいかなあ？」

千歳の話が、ふと、脳裏を過ぎった。おちんちんの裏側に縦にスジのようなモノがあつてその《裏スジ》なるモノを舐めてやると男子は悦ぶ、と言っていた。心美は顔を傾げるようにして兄の《逸物》の裏側を確かめた。

(ああっ！……ホントに線みたいのがあるっ♪)

——れろん、ちろっ、るろう……えろう、れろう、れろろろろっ……

千歳の話の思い出しながら、心美はそこを舌先で舐めあげるようにしてみた。《逸物》が嬉しそうに、ふる、ふるっ、と震えた。

(あはっ♪……にっこって、ホントに気持ちがいいんだあ♪)

「もつと、してあげるね♪……つと……しい……しい……お、お兄ちゃん、まだおつきしちやダメだよ?……」

つい声にだしてしまった心美は自分で口到人差し指を立ててから、思わず笑みを洩らした。

(……うぷっ……おちんちは、おつき、してるけどねっ♡)

「ええん、心美、これ以上見られるのは……は、恥ずかしいよう!」

——という訳で、体験版は『大人の都合』により一部カットさせて載きます。この後、お口に、どっぴゅん、されてしまった心美ちゃんは逃げるようにお兄ちゃんの部屋を飛びだし階下にある洗面所に飛び込んだでした。

それから数時間後、両親が『町内の寄り合い』（憂さ晴らしの『カラオケ大会』とも言う）に出掛けた留守にお兄ちゃんの逆襲（笑）が始まるのでした。

*

——こん……こん……

「心美(こころみ)ーっ？ ……ちょっと英和辞典を借りたいんだが、いいか？」
ノックの音に続いて兄の声が聞こえた。

あれからベッドで横になったまま悶々とし続けていた心美は、びくーっ、と身を竦ませた。

(ど、ど、どどどどどど、どどど、どうしよーっ!!)

顔など合わせられる訳がない。兄の顔を見たら、きつと、茹だこのように真っ赤になってしまいうに違いない。そうしたら、さっきの「悪戯」が露見してしまうのではないか。心美が思い惑っているとまた兄の声がした。

「心美ー？ ……入るぞ？」

(ひ、ひひ、ひえええええっっ!)

もうどうにも逃げ場のなくなった心美は、腰に掛けていたタオルケットを頭から被ると壁を向いて死んだ真似を……いや、眠った振りを決め込んだ。

(あっ……や、やだ、タオルケット引っ張り過ぎちゃったよう……も、もしかしてお

尻…でちゃってる?)

タオルケットを直そうとした瞬間、扉の開く音が聞こえて心美はその体勢で固まってしまった。

「心美? ……いないのか? ……って、眠ってるじゃん……」

兄が近づいてくる気配に、心美は生きた心地がしなかった。

(こっち、見ちゃダメだよ!! ……お願い、お兄ちゃん……)

下半身が、すーすー、するのは、もしかしてスカートまで捲れているのではないかと、心美は気が気ではなかった。

「おっ、何だよ心美のヤツ 寿司に全然手をつけてないじゃんっ! ……一個、もぐら
いっ♪」

(あ、あぁくん……それも、イヤっ!)

さつきから食欲などまるで湧かなかった心美だが、兄に食べられてしまうと思えば途端に空腹感を覚えた。

(い、一個だけだからね……ウニはダメだからねっ!)

『カラオケ大会』(いや、『町内の寄り合い』)の時は決まってウニの入った『特上寿司』である。大好物のウニだけは死守したい心美は、しかし、身動きもならず祈

るばかりだった。

「どれにすつかなーっ♪…………ウニは…………」

(いや——っ!?)

思わず叫びそうになった心美はタオルケツトの下で必死に口を押さえていた。

「…………心美の好物だから、勘弁してやるか…………じゃあ、大トロ貫いな♪」

(お、お兄ちゃん♪…………うる、うる、うる♪)

心美はタオルケツトの下で兄に感謝を捧げたのだった。元々、心美の分の寿司なのだが。

「…………はむ、はむ…………うめくえ♪…………つと、いけねえ辞書を借りに来たんだっ：

…………ええと、英和辞典はっ…………」

(な、なんだ…………辞書を借りに来たのか…………)

「おっ、あつた、あつた…………と…………」

(ああ、良かったあ…………これで、出てってくれるわね…………)

ほっ、と一安心した心美だったが、扉に向かう筈の兄の足音がベッドに近づいてくるように思えてまた身を硬くした。しかも、兄の足音は心美の下半身の方へと移動しているように感じられるのだ。

(や、やだ、どうして? ……じ、辞書はあつたんでしょ?)

タオルケツトの下で戦々恐々としている心美に兄が小声で囁いたのだった。

「心美ーっ、パンツ見えてっぞーっ♪」

(ひいんっ!!?)

「起きないなら、お兄ちゃん、心美のパンツ、じつくり見ちゃうぞーっ♪」

まるで心美が眼を覚ますかどうかを確かめるように小声で囁く兄の音がますます下半身に近づいて聞こえた。それ処か、壁に向かって死んだ振り——いや、眠った振りの心美の尻に、兄が囁くたびに呼吸が掛かって、完全にスカートが捲かれてショーツが丸見えなのを心美に伝えてきたのだった。

(いやーん、お母さーん……お兄ちゃんがいぢめるのう!)

「な、なんてエロいパンツを穿いてるんだ、心美のヤツっ!」

心美が眼を覚まさないとを確認できたからか、兄が声を普通に戻して捲(めく)くれたスカートを更に捲(ま)くりあげた。心美の小さな紫色のショーツは兄の眼前に余す処なく晒されてしまった。

(ひいんっ!!)

「心美のヤツ、ついこないだまで熊さんパンツを穿いてた癖に……こ、これって、殆

ど紐じゃねーかっ！」

(い、いいい、いつの話よーっ！)

「やっぱ、男ができると変わるってか？ ……ってコトは……ま、まさか、もう心美のヤツ、あいつとヤツちまったのか？」

(そ、そそ、そんなコト、言わないでようっ……………え、え、えっちは、しちやっただけどう…………)

「くそう、このパンツの中は、もう使用済みってか？」

(……………っ!?)

「待てよ……………それなら別に俺がちよつとくらい見ても問題ないよな？」

(も、ももも、もんだい…あり、あり、ありますう！)

「どれ？」

兄の手が上側の尻肉を持ちあげるようにして股間を顕わにして覗き込んだ。

「……………つと、これって……………染みか？」

(や、ややや、い、いや——っ!?)

タオルケットの下で心美は洩れそうになった悲鳴を必死になって飲み込んだ。そして、泣きそうな思いで両手で顔を覆ったのだった。先程、兄に「悪戯」しながら自

分で股間を弄って汚したショーツを穿き替えていなかったのだ。勿論、それ処ではない衝撃が心美の心（と喉）を揺さぶったからだだったのだが。

そんな心美の心の揺れを知ってか知らずにか、兄は顔を近づけて鼻を鳴らして（その匂いを嗅いだのだった）

「ん？……くん、んん？……ふん、ふん？」

（そ、そそそそ、そんなトコ……く、くん、くん、しちゃあ、いやーっ!!）

「なぐるほど……」

（な、な、なにが……『なぐるほど』なのう？……って……ま、まさか お兄ちゃん……）

先程の「悪戯」が兄に露見してしまったのだろうか。タオルケットの下で心美は生きた心地がしなかった。

「これって、つまり……」

（っ、っ、つまり……？）

兄の口から心美の「悪戯」を暴く言葉が発せられるのを確信して、心美はきつく両目を瞑った。

「……心美のヤツ、オナニーしたまま 気持ち好くて眠っちゃったんだな？……うぶっ

……俺と一緒にじゃんっ！」

(な、なんだ違った……よ、良かった……よ、よ、良くないっ！……ぜんぜん、よくなーいい！)

「そうか、そうか……あいつと最近会えないような事言ってたもんな、心美のヤツ……つまり、欲求不満が昂じてってコトだな？……この染みは？」

確かに先輩は合宿から地区予選、そしてインターハイへと勝ち進んでいて、最近はメールもこなくなっていた。

(でもう……そういうんじゃないのよね、たぶん……心美もメールの返事、ださなかったし……)

「しょうがねえなあ……ここは、お兄ちゃんが心美の欲求不満ってヤツを解消してやらんと、なっ♪」

一瞬、兄が何を言っているのか心美は理解できなかった。

しかし、兄の手がショーツに掛かり、する、する、と捲くり降ろされていくに到って心美の心臓は、どくんっ、と跳ねた。

(な、ななななな、なな、なにしているの——っっ!?)

パニックに陥った心美の脳内では、いや、そもそも、自分は死んでいるんだし……

じゃ、じゃなくてえ、眠ってる訳だから……と動揺し捲くりだったが、しかし、指一本動かす事もできずに固まってしまったのだった。

そうこうする内にショーツは裏返りながら膝の辺りまで降ろされてしまった。

「……つとお……これ以上は無理かな？」

壁に向かって側臥位（そくがい）横を向いた寝姿）になった心美の腰を持ちあげない限りこれ以上降ろすのは無理と判断した兄は、まず裏返ったショーツのクロッチ部を点検する。

「おおっ……見事に染みになってるじゃないか♪」

(……………っ！)

「心美のヤツう……そうとう激しくオナったな？」

(……………っっ!!)

「……ん？……もう乾いてるな……いつオナったんだ、心美のヤツ？」

頭から被ったタオルケットの下で心美は真っ赤になってしまった。『いつ』、『何処で』、それは絶対に兄に知られてはならない「秘密」であった。そして、視線が閉ざされている分、兄のしている行為が微かな音や気配となって、ありあり、と心美に伝わってくるのだった。

(は、恥ずかしいようっ……お兄ちゃん、もう許してえ……)

しかし、心美の願い空しく、ショーツの点検を終えた兄の手指がまた心美の尻肉に触れた。そして、先程、股間を覗き込んだ時の要領で片尻を持ちあげようとした兄の指が感動に震えた。

「や、柔らかけーっ♪」

(……………っ!)

先程持ちあげた時はまだ薄布一枚隔っていたのだったが、直に触る柔尻の感触は得も言われぬ感動を兄の手指に齎(もたら)したのだった。

思わず、当初の予定を変更(いや、後廻しに?)して兄の手指が、もにゅ、もにゅ、と双つの尻肉を揉みしだいた。

(ひいんっ!?)

「うひょう♪……………」これは堪らんっ♪」

何しろ彼女居ない歴を生まれて此の方更新中で、勿論童貞の兄である。女性の柔肌に触れた経験など皆無であった。学園生活最後となったこの夏、“ウォータービジネス関連のお姉さま”で童貞卒業をと、ちらっ、と考えないでもなかったが、それにはプライドと、何より財布が許さなかった。そして、子供の頃ならいざ知らずこんな

に柔らかく成長した心美の身体に触れる機会などあろう筈もなかった。

「……そういやあ、こないだプールで見た心美のオツパイもそれなりに成長してたよなあ……」

（そ、それなりに……って、失礼しちゃうなあ……ぶん、ぶん……心美、これでも87のCカップなんだからねっ！）

最初に尻肉に触れた時は、どきんつ、と身を竦ませた心美だったが、兄の如何にも初心者な、やわ、やわ、やわ、攻撃に少し身も心も委ね始めていた。

「心美のヤツ、最近あいつと会えないからなのか、何だか塞いでるしなあ……また、プールへでも連れてってやるかな……そうだ、オニユウの水着でも買ってやれば気分も変わるしな……」

（お兄ちゃんったらあ♪……優しいっ♡）

「そうだな、うんと際どいビキニなんか買ってやって、じっくり挿ませて貰うのがいいかな？」

（ぜ、ぜ、前言撤回いっ！……お、お兄ちゃんの、えっちっ！、すけべっ！）

尚も、やわ、やわ、と心美の尻を手指で堪能していた兄が、ふと、思い出したように言った。

「い、いかん、いかん……こんなコトをしている場合じゃなかったっ！」

(えっ? ……やめちゃうのう?)

兄の手指の刺激に少し満更でもないように心まで、とろん、とし始めていた心美が残念そうに身じろいだ。

「……確か、さつき、＼使用済み＼の心美のおまんこを、俺がちよつと見るくらい問題なし……だったよな？」

(も、ももももも、もんだい……大あり、大ありですうっ!!)

「どおれ？」

タオルケツトの下で、さーっ、と蒼褪めた心美を余所に兄がまた尻肉を持ちあげるようにして股間を覗き込んだ。

(ひいひいひいっ!?)

もう既に、心美の一番恥ずかしい処を隠す薄布は膝の辺りに摺り降ろされてしまっていた。更に兄の両の親指が大胆にも、こんもり、と膨らんだ大陰唇に宛がわれ、大きく左右に寛げてしまったのだった。

「うほうおおおっ! ……すっげえ、綺麗なピンク色だあっ♪」

(いやあああああああ——っ!!)

タオルケットの下で心美が小指を嚙んで必死に悲鳴を飲み込んだ。

「こ、これが……これがおまんこかーっ♪」

兄が感動のあまり叫ぶたび、寛げられた心美の粘膜に呼気が掛かって、兄の目鼻がまさに《そこ》の間に近にある事を心美に知らしめたのだった。

(ひいひいひいっ!!)

最早、心美の理性は軽く飛んでいた。それが二人にとって、良かったのか悪かったのか、兄は更なるステップへと踏みだした。

「ちよつと触るくらい……問題ないよな？」

(あつ、あああ、あり、あり、ありま……ひいひいっ!!)

兄が指先を唾液で濡らして（こういう知識はエロ雑誌やらDVDで織り込み済みであった）心美の恥ずかしい粘膜を擦りあげたのだ。心美は、嫌悪感や拒絶感より、思わず感じてしまった自分に驚愕した。

「ええと、膣穴は……これだよな……ここはまだ早いよな……で……おつ、これが、おしっこのでる尿道口だな……」

(◆%#◆◇△——っっ!!)

無遠慮に撫ぜ廻す指先に、羞恥心が甘味なスパイスとなって、心美に快感を刻んで

ゆく。小指を噛んで必死に心美が堪えるのは、最早悲鳴ではなく快感だったかも知れなかった。

そして、兄は無意識の内にトンでもない行動にでた。

「ええい、これじゃ良く見えねえっ！」

そう言つて心美の身体を手前に半回転させ、両足を開こうとしたのだ。

「……つと、パンツがじゃまだな……」

更にそう呟きながら膝の辺りに引つ掛かっていたショーツから片足を抜くと、そのまま両手を膝裏に宛がってM字開脚に押し開いてしまったのだ。

(◀○§□◆%#◇◆●———つつつ!!)

「おお、これならバツチシだっ♪」

最早、兄には心美を起こしてしまうかも知れないなどという意識は、微塵もなかった。初めて目の当たりにする《女性器》に夢中になっていたのだった。その証拠に、手前に半回転させた時にタオルケットが摺れて心美の顔が覗いているのにも気がつかなかった。心美は、そつ、と薄目を開けて兄が自分の股間に夢中になっているのを確認してから、こつそり、タオルケットを顔の上に掛け直したのだった。

「心美のヤツ、いつの間にかこんなトコに毛を生やして……」

心美の下草に指を通して梳きながら兄が感慨深げに呟いた。

「…一緒に風呂に入った頃は、綺麗な縦スジしかなかったのになあ……」
(い、いい、いつの話ようっ！)

心美の脳裏に先程兄の部屋で眼にしたエッチ本のタイトルが、ありあり、と思い出された。『妹の縦スジ』という何とも直球であからさまなタイトルが。

(や、やっぱり、お兄ちゃんは……あ、あの“ご本”で……ひ、一人えっち……するのかな?)

“ご本”などという立派な代物ではなかったし、今は惜しげもなく塵箱に捨てられたその『家宝』の代わりに、あの後兄が“おかず”に使ったモノの正体を心美が知ったら、死にたくなる事請け合ひであった。

(……こ、心美の場合は……あれ? ……心美って……いつも……どうだっけ……)

兄の指に、さわさわ、と下草を弄られる心地好さに身を任せて心美は自分の“密室のお遊戯” (↑心美の命名である) に思いを馳せた。

何かの“ご本”を使った記憶はなかった。それでは誰かをイメージして? 千歳の言葉が、ふと、思い出された。『男子はエロ本やDVDなんかで“する”“みたい”だけで、女子の場合は誰かを思い浮かべて“する”“娘(こ)が多いみたいね。あんた

の場合も先輩なの?』そう訊かれてこの手の話題の苦手な心美は何となく曖昧に頷いていた。けれど、初体験の前も「それ」は先輩ではなかった。勿論、痛かっただけの初体験の後は暫く触るのも怖かった。そして、あの悲惨な二回目のは、また暫くその気になれなかったのだった。しかし、それからひと月あまり経っている。その間、何回か、「していた」。

では、相手は誰だったろうか? 心美の場合、具体的な行為を思い浮かべる事は殆どなかった。寧ろ、秘芯(心美はクリトリス派であった)を弄る心地よさに身を任せ、その最中に、臍に相手の顔を思い浮かべるのが常だった。

そして、心美は唐突にその「相手」に気がついてしまった。

(お、お、お、お……お兄ちゃんっ!?)

心美はタオルケットの下で耳まで真っ赤になって両手で口を押さえていた。

『お兄ちゃんが好き』という事と、『密室のお遊戯の相手がお兄ちゃんである』という事は、似ているようで根本的に違っていた。

その時、心美の下草を弄るのに飽きた兄が、下草を上へ持ちあげるようにしてその下部にターゲットを移し、奇矯(ききょう)な声をあげた。

「おひょおうっ! ……これって、クリトリスかーっ!」

(ひいっ!!)

一番弱い部位を弄られる恐怖(?)に、今しがた思い至ってしまった”とても深刻で根が深い大問題”を、心美は暫し棚あげせざるを得なかった。

「待てよ、クリトリスって、一番敏感なトコだよなあ……確か？」

指を差し伸べようとした兄が躊躇(ためら)うように言葉を吐いた。

「いきなり指は……ダメだよなあ？」

(う、うん、うん……お、お触り……げ、厳禁なのう!)

「となるとお……ちよつと舐めるくらい……おお、それなら問題なし、なしっ!」

(……………っ!?)

先程までの『ちよつと見るくらい』、『ちよつと触るくらい』は疑問系だった兄が、『ちよつと舐めるくらい』はあっさり『問題なし』と断定を下し、心美も何処かそれを待っていた風もあった。

——れろん、れろ、ちろん……れろ、えろ……

(ひいんっ♪)

少しざらついた兄の舌先が恐る恐る舐め始めた微妙な快感に、心美がまた小指を嚙んで堪えた。思えばこれが心美のクンニリングス初体験であった。

先輩との初体験も勿論だったが、二回目も舐めたそうにする先輩を微妙に拒んでしまった心美だった。啄ばむようなキスで始まり、下着姿でベッドに入り、デーパーキスに移る頃には先輩の手指がブラの上から心美の乳房を揉みしだく。先輩の指がブラのホックに掛かると『あ、灯りを消して……』と囁いて先輩がベッドから降りて壁際のスイッチを消して戻る間に心美は毛布の下で下着を全て脱いでしまった。それから先輩が乳房を舐めながら股間に手指を伸ばす。それまで拒む訳にもいかず、先輩の手指を受け入れる心美は殆ど「まぐろ」状態だ。やがて、先輩が身体を更の下へと移動し始めると、慌てて心美は訴えるのだった。『も、もう、心美……いい、いいみたい……だから……』と。先輩とて心美と同回数を経験値しか持ち合わせてはいなかったので、結構昂ぶってしまっていてそのまま挿入に到る……というのが、二回とものパターンだった。

——ぴちゅ、ちゅぷ……えろ、れろろ……ちゅろ、ちう、ちゅぽ……

力加減が判らずに心美の秘芯を、おっかな、びっくり、に舐めていた兄が舌を離して言葉を吐(は)いた。

「これって、まだ……ええと、剥けてないん……だよな……？」

そして、考えるように続けた。

「…どうすりゃいいんだ？ ……もつと、感じさせないと…いかんのかな？」

舌先の刺激が途切れて、心美の心にもどかしさが募る。自分でする時は、そつ、と指で剥いた事もあった。しかし、眠っている筈の心美が『指で剥いていいから』とお願いできる訳もない。（いや、眼が覚めていても、そんな「おねだり」を心美ができる訳もなかったのだが…）

戻ってこない舌先に悶々とする心美は、不意に気がついてしまった。タオルケットを被った心美には薄暗い視界だったが、今、部屋の灯りは煌々と灯っているのだ。そして、心美の股は兄の眼の前に大きく開かされているのだった。

（お、お兄ちゃんに……ま、丸見え——っ!?!）

しかし勿論、眠っている筈の心美が足を閉じる事、叶わず。両手で口を押さえて絶句する心美に、漸く打開策に思い至った兄が呟いた。

「……そうだよ、もつと感じてくれば……確か、自然と剥けてくるんだ…よな…」

朧なエロ雑誌からの知識を総動員して兄が確認するように次なる行動を口にする。

「それなら、おまんこを舐めてやりゃあいなんだっ！」

『おまんこ』という大雑把な表現でも、兄の舌が次に向かう部位が《膣口》なのは心美にも充分理解できた。

そして、膝裏辺りに宛がわれていた兄の両手が、つうーつ、と下へと滑ると、既に解れて食みだし掛けていた少陰唇を両の親指でまさに、くぱあつ、と寛げてしまったのだった。

(◀○§□◇#●———っっ!!)

「おおおおおおうっ!?!……改めて見ても、心美のおまんこって、すっげー綺麗だよなーっ♪」

誉め言葉なのに微妙に、いや、かなり恥ずかしい心美だった。その上、兄が喋るたびに呼吸が恥ずかしい粘膜に掛かり、自分が今取らされている体勢が、ありあり、と脳裏に浮かぶのだ。心美の身体の奥で、じゅくんっ、と潤ったのが判った。

(や、やだあーっっ!?)

「それに、何とも言えない、エロい匂いがするよな……って、けっこう濡れてるじゃんっ♪」

その時、寛げられて開いていた膣口から、たらーっ、と愛液が会陰部(えいんぶ)外陰部と肛門との間)を伝い落ちた。

(ひいひいひいひい———っっ!!)

「おおっと……(れろ、ちゅうろう、じゅるっ)……」

膾口から垂れてきた心美の愛液を慌てて舌尖で舐め取って兄がそれを口腔で転がした。舌尖に、ぴりっ、とした刺激が広がった。

「なんか酸っぱいような…塩味も少しあるかな…しかし、ちんこに、びんびん、くるエロイ味だっ！」

(◆#◇※◆●——っっ!!)

心美はといえば、恥ずかしさよりも、秘唇をひと舐めされただけで己が背筋を駆けのぼった快感に途惑いを隠せなかった。

タオルケットで顔を覆った、言い換えればまるで《目隠しプレイ》のような状況に、心美の身体はいつも以上に昂ぶっていたのだった。

——れろん、ちゅぶ、じゅるるっ……えろう、るろっ、ぢゅるるっ……ぢゅるるっ、じゅる、ぢゅぶうっ……

兄の舌が、後から後から溢れてくる心美の愛液を舐め取り、音を立てて啜りあげる。その唇と舌尖が齧(もたら)す直接的な刺激に加え、啜られる卑猥な水音が《目隠しプレイ》状態の心美の耳を侵して、いやまさに犯していった。

(ひぐっ……ひぐ、ひぐうっ……)

タオルケットの下で両手で口を押さえて心美が必死に声を堪えていた。それでも、

否応なく官能を刻まれた心美の腰が、ぴく、ぴくくつ、と震えた。

「おおうつ！……感じてきた……かな？」

嬉しそうな声をあげて兄が尚も膣口を舐め廻し、愛液を啜り立てる。

そして、今度は両手で心美の腿を押し広げるようにしてから、シーツに顎をつけるように身体を沈め、尖らせた舌先を膣口に差し込んだのだった。

(ひいひいんんっ!!)

心美の腰が、びくんっ、と跳ねた。

しかし、委細構わず兄の舌が心美の膣口の粘膜を舐め廻し、溢れだす愛液を啜りあげる。

——れろう、えろう、るろう……じゅるっ、じゅじゅ、ぢゅぶっ……れるっ、れろっ……ぢゅずっ、じゅるるるっ……あふっ……

(ひいんっ！……ひんっ、ひんっ……あひんっ)

心美は声を堪えるのに必死だった。噛み締めた小指が、じん、じん、と痛み目尻に涙が滲んだ。

そして、兄が鼻先に触れる心美の濡れた下草に、擦ったそうに視線をあげたその時だった。

「びゅーう♪……クリトリスが膨らんでるぜえっ♪」

軽く口笛を吹いて兄が華やいだ声をあげた。

(や、ややや……だ、だめ、だめ…お、お豆ちゃんは…だ、ダメえーっ!!)

心美の必死な願い(?)空しく兄は膣口を弄っていた舌を引き抜いて、れろうんつ、と秘芯を舐めあげたのだった。

(ひぐうっ!?!…◆#◇※●—っ!!)

その途端、びくうんつ、と心美の腰がベッドの上でバウンドした。

「おおっとう!」

一瞬、驚いたように声をあげた兄だったが、直ぐにそれが快感によるものだと気がついた。

「ほひよおおうっ♪」

言葉の体を為さない奇声をあげて兄は心美の両腿を、がっちり、と抱え込むと、赤く充血して膨れあがった秘芯にターゲットを定め、れろん、るろうんつ、と舐め廻し始めたのだった。

(ひぐう!?!…ふぶっ、ひぐううっ!!)

小指を噛んで必死に声を殺す心美の腰がバウンドを繰り返す。それを身体で押さえ

込んで兄の舌が容赦なく心美の弱点(クリトリス)を責め苛む。

「おおう、お兄ちゃん我慢できなくなっちゃったぞっ！」

そして、兄はショートパンツのチャックを降ろし、ブリーフごと膝まで摺り降ろしてしまったのだった。

(◆%#●◇△——っっ!?)

忙(せわ)しなくチャックが降ろさせる音に交じって衣擦れの音が《目隠しプレイ》状態の心美の耳に、ありあり、と兄の行動を伝えてきた。

(お、おおお、お兄ちゃんっ!……ひいいいいんっ!?)

兄の行動の真意に途惑って硬直した心美の膣口を兄の手が弄ったのだ。

その掌で掬い取った心美の愛液を反り返る《逸物》になすりつけ、兄が《それ》を乱暴に扱き始めた。

「おおう、おおほおう♪……こ、心美の、おまんこ汁……き、気持ちエエーっ♪」

(◀○s□◆#●——っっ!?)

兄の手指が、ぬちよ、くぶっ、と卑猥な恥音を響かせる。タオルケットの下で眼には見えずとも、兄の行為は心美に如実に伝わっていた。

——じゅくんっ……と心美の奥でまたも新たな潤いが起こり、膣口から滴ったそれ

がシーツに染みを広げていった。

「おおう、おおう♪ ……ここ、心美い…お、お兄ちゃん…お兄ちゃん…お兄ちゃん…が、我慢が…なっ？」

兄が《逸物》を扱きあげながら切なげな声を洩らす。

「…ちよ、ちよつと使うくらい…つて…さ、流星に使う（挿入する）のは…ま、拙いか？」

躊躇（ためらい）いと切なさが兄の声音に交錯していた。

「でも、な？ ……し、《使用済み》だし…な？ ……ちよ、ちよつとくらい使ったって…わ、判らねえよな？」

（ひいっ!）

兄の言葉が正確に理解できずに硬直した心美の耳に兄の囁きが届いた。

「…心美、いい娘（こ）だから、もう少し眠ってるよ…お兄ちゃん、すぐに終わらせるから…な？」

（◀○○□◆%#◇◆※▶———つつっ!）

また心美は心が飛びそうになった。心美の耳は、兄が言った言葉の意味を、正確に脳に伝えるのを拒んでいるかのようにだった。いや、もしかしたら聞き間違いかも知

れない。心美はそう思ったのかも知れなかった。

「これだけ、ぬる、ぬる、になつてれば、多分すんなり、挿入(はい)るよな？」

しかし、続けた言葉とともに、兄の手指が心美の両腿を海老反りのように持ちあげて、最早聞き間違いないなどではなかった事を心美は思い知らされたのだった。

(ね、ねね、ねえ、お兄ちゃん……ほ、ホントに……ほんとに…………いい、いい、いい、挿(い)れちゃうの？……こ、心美たち……きよ、兄妹(きょうだい)だよ？)

心美は両目をきつく瞑って、心の中で兄に訴えた。

先輩の顔が今日初めて脳裏に浮かんだ。これは先輩に対する明らかな裏切りだ。

いまなら――、

いま止めれば――、

いま声をだせば――、

いま心美が拒めば――、

まだ辛うじて間に合うのではないか。

しかし、先輩に対する裏切りという罪悪感以上に、兄妹(きょうだい)で行為(きようゐ)に到(いた)つてしまうという背徳感の方が大きく心美の心を揺さ振っていた。

いや、それよりも何よりも、自分の身体が兄の挿入を待ち望んでいる事に、心美は

衝撃を受けてしまったのだった。

昼間、「悪戯した」報いをいま受けるのだ。

いや——、

いや違う——。

綺麗事で誤魔化すのはよそう。

先輩に対する罪悪感でも、近親相姦という背徳感でも、まして報いなどであろう筈がなかった。確実に今、心美の身も心も、兄の《男性》を——昼間「悪戯した」あの大きな《おちんちん》を欲しているのだ。

(ひいんっ♪)

心美の内面の葛藤を嘲笑うかのように兄の《逸物》が鴉(しとど)に濡れた膣口に宛がわれていた。

一瞬、逡巡するように兄が身体を強張らせた。

しかし、次の瞬間、兄の《逸物》は躊躇(ためらい)を振り切って膣奥に向かって押し込まれていた。

「くうううううううっ♪」

兄が切な気な吐息を洩らし、タオルケットの下で心美が両の小指を噛み締めた。心

美が堪えたのは悲鳴だったのか、嬌声だったのか、心美自身にも判らなかつた。

「す、すげ——えっ！…すげーよっ♪…これが…これが、おまんこの
臆内(なか)かーっっ!!」

兄の感動に咽ぶ声が狭い部屋に木霊していた。

(ひいひいひいひいっんんっ♪…お、おっきいんっ!!)

一方、臆の最奥、子宮口にまで一突きで届いた凶悪な程の《逸物》に、心美の喉が堪え切れずに微かな嬌声を洩らす。しかし、初めての快感に身を震わせた兄の耳には聞こえていないようだった。

「なんて、あつたかくて…なんて、気持ち好いんだーっ♪」

幸せそうな声音に交じって、ふーうっ、と兄が吐息を洩らし、次いで、びくうんっ、と身を振った。

心美の臆褓が、ぞわ、ぞわわっ、とまるで抽送を促すように蠕動したのだった。

「すげえ、すげえよ…心美のおまんこが、誘ってるっ♪」

(ち、ちち、違うモンっ!…こ、心美は誘ってなんか…くあっ、はあああっ!)

心美の途惑いを余所に兄が、ゆっくり、と《逸物》を引き抜いてゆく。見降ろせば、

鷓(しとご)に濡れた膣口から、薄桃色の粘膜が《逸物》に絡まるように食みだして行く。それとともに掻きだされた愛液がシーツに滴り落ちた。

「おおおうっ！……エロいっ！……心美のおまんこは……エロすぎだぞおっ♪」
……………っ!?)

そしてまた、兄が腰を押し込んでゆくのに連れて、食みだしていた心美の膣粘膜が
またも《逸物》に絡まりながら戻ってゆく。

それを二、三度繰り返して視的エロさを愉しんだ兄は、しかし、どうにも堪らぬ風
情で腰を振り立て始めたのだった。

——ぬちゅ、ぐちゅ……ぬふっ、ずちゅ……ぬちゅ、ずゆりっ……ずちゅ、ぐちゅ
……ぬぼっ、にゆりゅっ……

鷓(しとご)に濡れた心美の膣口から卑猥な恥音が洩れ聞こえる。

「おおおう……おおほう♪……こ、心美のおまんこ……気持ちいいぞお♪」
兄が声を荒げて腰を振り立てる。

(ああん、ああ、だめっ！……お、お兄ちゃんのおちんちん……お、奥に、あたっ
……当たってるう♪)

堪え切れぬ嬌声が心美の喉から微かに洩れ始めた。

(ど、どうしよう……こ、心美……こ、こえっ……声がでちゃう♪)

兄に気づかれたら困る。その思いが更なる昂ぶりとなって心美に跳ね返る。

「……ひんっ……ん……んんっ……」

しかし、小指を噛み締めた唇から微かに洩れた嬌声も、心美の膣内の齎(もたら)す快感に酔い痴れていた兄の耳には届いていないようだった。己が左手しか知らなかった兄は、まさに身も心も蕩けさせて腰を振り立てていった。

——ずりゆ、ぐちゆっ……ぬちゆ、ぬぼっ……ぐちゆ、ぐふっ……ずりゆ、ぬちゆっ……ずちゆ、ぐちゆっ……

二人の結合部から恥音とともに掻きだされた愛液が飛沫となってシートに迸る。

「……ひんっ……ん、んん……いん、いんっ……」

(だ、だめ、ダメーっ！……こ、心美……こ、こえっ……声がっ!?)

心美の裡なる葛藤をまるで嘲笑うように、兄は心美の両腿を抱え直し力強く挿抜を加速させる。兄の《逸物》の先端が、ごっん、ごっんっ、と心美の膣奥で子宮口を叩きつける。

「……ひんっ……ひぐっ、ひぐんっ……いいっ……いいいん♪」

くぐもった嬌声とともに心美の身体がまたバウンドする。タオルケットの下で心美の顔が、いやいや、をするように左右に振れる。

しかし、眼を瞑って快感に身を委ね腰を振り続ける兄は気づかない。それ処か、更に奥へ奥へと挿抜を繰り返す。

(や、やだ、ダメっ！……も、もっ……ん、ん) *みい*……が、がまんっ……がまん できなあ

「……い、いくっ……いくっ……いっくううっ♪……い、いっきゅううううううううううううんっ♪」

心美の喉から堪え切れぬ嬌声が迸り、四肢を硬直させ大きく仰け反って達したその刹那――。

——ふしやああああああああああつっ!!

心美は盛大に潮を噴いてしまったのだった。

「おわあっ！……おわわわわわああああああつ！……こ、心美のヤツ、小便洩らしやがったっっ!？」

兄が驚きの声をあげた瞬間だった。

「ち、ちちち、ちがうもんっ!!」

心美が顔を隠していたタオルケットをかなぐり捨てて叫んでいた。

「お、おとお、おしっこじゃ……な、ないもんっ!! ……お、おお、お潮だもんっ!!」

「お潮? ……ん? ……ん? ……あつ、ああ、潮吹きつてヤツか? ……つて、心美、いい、そんなに感じちゃったのか?」

「な、ななな、なんてこと言うのよ、おにい………つて!」

「つて? ……おっ!」

「………つつつ!」

漸く、眼と眼が合つて、互いに今の状況（未だ兄の《逸物》は心美の膾内（なか）であった）を脳内に伝達し終えた二人は、絶句してしまつたのだつた。

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

お気に召しましたら、本編もどうぞ宜しくお願い致します。

この第一話は、四〇〇字詰め原稿用紙換算二二〇枚程のオリジナル『らぶエロえっち』ストーリーです。

第一話のメインコンセプトは『自分と妹の為に一旦は想いを封印して友人との交際を認めたものの、やっぱお前は俺のモノだーっ、と実の妹を寝取ってしまうお兄ちゃん』です♪

この後、四〇〇字詰め原稿用紙換算一〇〇〜一五〇枚程度の続編を第四話まで構想しております。

「**②** 戦略的な誘惑!？」第二話のメインコンセプトは『兄との肉体関係をカミングアウトできなかった妹の目の前で寝取られるお兄ちゃん』です♪

「**③** 先輩の逆襲」第三話のメインコンセプトは『恋人になった筈の妹の寝取られ現場に心ならずも勃起してしまうお兄ちゃん』です♪

「**④** ツンな子悪魔とビクな乙女」第四話のメインコンセプトは『あっちこっちで寝取ったり寝取られたりで、もう何が何だかのお兄ちゃん』です♪

それでは、どうぞ宜しくお願い致します。

寝取り寝取られ振り振られ

—— 心美とお兄ちゃんのトンでもない一日 ——

② 戦略的な誘惑!?

晴れて(?) お兄ちゃんと “らぶらぶ” な関係になってしまった心美ちゃんが、
彼氏との関係を清算するべく親友の千歳ちゃんに相談する事に……。

パジャマに着替えて、アルコール(ワインです)の力を借りてイザ千歳ちゃんにカ
ミングアウトしようとした処へお兄ちゃんが入って来てしまいます。

済し崩しにトランプなどしながら三人で飲む内に酔いも廻り、千歳ちゃんが賭けを
しようと言いだします。

「勝った人がドベの人にキスをするっていうのは、どう？」

尻込みする心美ちゃんを余所にお兄ちゃんは大乗り気。勝っても負けても美少女二人のどちらかとキスができるのだから当然です。

一回戦は、勝者が心美ちゃん、ドベが千歳ちゃん。ほつ、ととして軽く唇に触れただけで終わりますが、二回戦はお兄ちゃんが心美ちゃんにキスをする事に。

勿論、お兄ちゃんが軽いキスで済ませる訳がありません。

らぶエロなベロキスに、とろん、とさせられた心美ちゃんを千歳ちゃんが怪しい瞳で見詰めています。

そして、三回戦の勝者は千歳ちゃん、ドベがお兄ちゃんです。

千歳ちゃんのベロキスは、それは、それは、それは、長く続いたのでした（笑）。当然、面白くないのは心美ちゃん。

こうして、心美ちゃんのカミングアウト計画など何処へやら、次第にエスカレートしてゆくキス合戦。

お兄ちゃんが暑いと言ってティーシャツを脱いだのが合図だったかのようには、千歳ちゃんも。パジャマのズボンを脱ぎ捨てます。

「え？……なんで下から？」

「だって、ブラしてないもん……上を脱いだらおっぱい丸見えっ♪」

ぐびっ、と喉を鳴らしてパジャマの胸元に眼を遣るお兄ちゃんに、艶めいた視線を絡ませて千歳ちゃんが言ったのでした。

「次、あたしがドベでえ……お兄さんが、トップならあ……ひとつだけ言うコト、聞いてあげよつかなあ？」

何やら『王様ゲーム』の様相を呈してきた次の勝負に燃えあがるお兄ちゃん。

しかし、勝者は心美ちゃん、ドベがお兄ちゃんでした。

さつきから千歳ちゃんの学園生とは思えないけしから**ん膨らみ**に眼を奪われているお兄ちゃんに、心美ちゃんが下した命令は……。

「そ、そのショートパンツを脱ぎなさい!!」

劃して、お兄ちゃんは残り一ドベ（ブリーフ一枚）、千歳ちゃんは二ドベ（パジャマの上とショーツ）、心美ちゃんも三ドベ（パジャマの上下にショーツ）で、ストップポンになってしまいます。

脱ぐ物が無くなった時、勝者は敗者に一体どんな命令を下すのでしょうか……。

*

第二話のメインコンセプトは『兄との肉体関係を口外できなかった妹の目の前で寝取られるお兄ちゃん』です♪

乞うご期待っ！……………でございまするう♪